

高層住宅居住が子どもに与える影響

鳥 飼 香代子

The Influence of Dwelling in High-rise Buildings on Children

1. 研究のねらい

熊本駅前東A地区^{注1}の再開発計画として建設予定の構想案が昨年4月明らかになった。新幹線全線開通に向けて建設されるのは、「森ビル」^{注2}提案の108メートル、33階建の超高層ビル^{注3}である。1, 2階部分は熊本市の情報発信基地や小売店になる予定だが、それ以外の上層階は分譲マンションである。比較的地価も安く、空地も多い熊本で、なぜ超高層の分譲マンションなのか。本稿では、超高層の住宅はどのように評価されているのかを、子育ての場として適切かどうかという視点から、文献を中心に検討する。

2. 高層住宅と低層住宅における子供の発達の差

表1より、高層住宅に居住する子どもを低層の子どもと比較すると、子どもの発達に差があると報告されている。第一の指摘は、大地から遠く離れているため、大地までの行動が時間的にも距離的にも相当のエネルギーを必要とし、その結果として母子ともに行動に変化が現れることである。つまり、行動

上は自宅に閉じこもりがちになる点である。

第二にそのことが心理的にも、派生的に様々な問題を生じさせていることの指摘である。外出しにくい高層階の母親と子どもは一緒にいる頻度が高く、このため母親の干渉数も増加し、結果的に子どもは自発的な行動がとりにくくなると考えられる。心理的变化の中の⑤は、住環境ストレスを受けやすいということである。高層マンションは、一般に低層に比べ世帯数が多くなるためコミュニティが形成されにくい。あるいは、居住者同士が顔見知りになりにくいことが多い。そのため、お互いの状況への配慮が少なく、上の階からの振動、生活に伴う騒音（子どもの遊び声、夜間の洗濯、楽器の音など）が、知り合いから発せられるものより大きくなることが多く、ストレスが高くなる。さらに⑥で、大規模分譲マンションほど発生が多くなると考えられるエレベーター内犯罪の不安、特に子どもへの不安が指摘されている。

第三の項目は成長期の子どもの感覚への問題である。生物体としての生育の脆弱さの指摘であり、成長途中の生物体である子どもへの重大な影響である。

第四の項目は、以上の項目の結果として健康に影響が出てくることを指摘している。また住宅が高層化すればするほど、強風を避けるため窓の開閉回数が減り、ダニやカビの発生が増え、アレルギーを引き起こしやすい指摘もある。

このように、高層住宅は低層住宅の子どもと比較すると、子どもの精神的・肉体的成長に相当負荷がかかることがわかる^{注4}。

子どもの成長に遊びは大きな影響を与える。この点はどうであろうか。

表2より、一戸建て住宅の子どもに比べて、集合住宅、特に6階以上の子どもは、外遊びの時間が1日当たり平均0.6時間少ないことが分かる。子どもにとって「遊び=生活」であり、子どもの成長発達に重要な遊び時間が高層ほど減っている。

さて、集団生活に入っていく準備期間と位置付けられる幼児にとって、生活習慣の自立は重要な成長課題である。この点はどうであろうか。

表3より、特に高層階の子どもは、歯磨き、うが

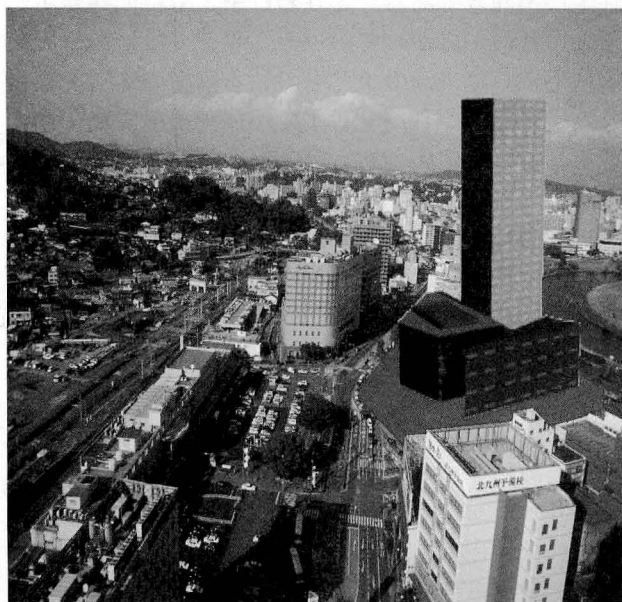


図1 駅前に構想されている超高層ビル…研究室作

表1 高層住宅居住に伴う母子の健康・行動の変化

1母子の行動学的変化	①外出回数の減少 ②人づき合いの希薄化 ③子どもの遊びの減少
2母子の心理的变化	①乳幼児の夜尿症・おもらしの増加 ②幼児の集団生活への不適応 ③母親の心理的隔絶感・疎外感 ④母子間の心理的過剰密着→幼児の生活習慣の自立の遅れ ⑤環境ストレスの増大 ⑥エレベーター使用に伴う犯罪・事故への不安感
3乳幼児の感覚の変化	①高所感覚の麻痺 → 転落事故→高所平気症 ^{注4} ②自然感覚の低下 ③運動感覚の低下 ④生理的感覚の低下
4母子への健康度の影響	①自覚症状有訴率の増加傾向 ②アレルギー増加傾向 ← 部屋の密閉 ③体力低下意識

(織田正昭『高層居住による母子への心身の影響』
子ども環境学会 1989)

表2 一日当たりの子どもの外遊び時間
(2003年幼稚園児対象)

住居様式	人数	平均時間
全体	550	2.3
一戸建て住宅	129	2.7
集合住宅	411	2.2
低層住宅(5階建てまで)	249	2.2
高層住宅(6階建て以上)	86	2.1

(織田正昭『高層マンション子育ての危機』
メタモル出版 2006)

表3 幼児の基本的生活習慣の自立(“できる”と“何とかできる”児の割合) 単位%

	低層群	高層群
日常のあいさつ	82.4	55.6
排便	79.6	59.3
手洗い	85.3	66.6
食事	85.3	81.5
歯磨き	82.4	59.3
うがい	79.4	55.6
衣服の着脱	79.4	44.4
靴の着脱	82.4	48.2
後片付け	70.6	51.9
お手伝い	79.4	55.6

注 ①低層群(249人)とは5階建て以下
②高層群(86人)とは6階建て以上とした
③出典は表2と同じ

い、あいさつ、衣服の着脱などの基本的な生活習慣の自立割合が低層階の子どもより低いという結果が出ている。ほとんどの項目において高層階の子どもが、自立割合が低いことが分かる。

3. イギリスの事例

イギリスでは第二次大戦直後から、大量の労働者の住宅を確保するため、大規模な高層住居が積極的に建設された。しかし、その後子どもの心身への悪影響が報告されたこと、窓からの転落事故が相次いだこと、高層住居が犯罪の温床になり一部の地域では入居者がいなくなったこと、などから高層住宅は住宅に不向きである、とりわけ子どもに問題が生じるとの認識が広がっていった。現在では、公営の高層住宅に6歳未満の子どものいる家庭の入居を禁止した、子どもから高齢者までが休養出来て健やかに暮らせてこそ住居であるという思想が、住宅政策に浸透している^{文1)}。

近年の日本では、都市再生の一環として、特に中心地区は超高層マンションや超高層ビルに建て替えられている。しかしイギリスの都市再生事業^{注5}では、住民参加やコミュニティが重視され、いわゆるコミュニティ・ビルディング(コミュニティの強化)が都市再生の重要な戦略として位置づけられている。そのためイギリスの都市再生では、入居世帯が膨大になりコミュニティ形成に無理があると考えられる高層の公営住宅を潰して、最大4階までの低層住宅に建て替えられている。そこには、コミュニティを強化するという配慮が働いている。

イギリスの都市再生事業のこのようなコミュニティ重視への転換は、ブレア労働党政府のもとで、その地域が本当に貧困を克服し活性化していくためには、それを主体的に担っていく住民とコミュニティの力量を高めなければ解決にならないと考えられた結果である。そして、コミュニティの強化は子どもを地域で育て、犯罪の発生からも守る。

4. ま と め

高層住宅は低層階の子どもと比較すると、子どもの精神的・肉体的成長に相当負荷がかかり、子どもの発達を阻害することがわかる。

住宅は低層であるほうが、コミュニティ形成にも有利であり、強固なコミュニティが子どもを地域で育て、かつ犯罪からも守る。子どもに与える影響からは、高層住宅再検討が必要である。

注及び参考文献

注1) 熊本駅前の東A地区とは熊本駅と白川の間の再開発対象地域、駅の東側正面に当たる。

注2) 「森ビル」株式会社は六本木ヒルズ森タワーなど東京だけでも120棟のオフィスビルを所有している総合デ

ベロッパーである。

注3) 超高層ビルとは、一般には60メートル以上の建築物をさす。

注4) 近年指摘されるようになってきた関連する現象に高所平気症がある。

これは高さについての恐怖心が薄い症状で、生まれながらに高層マンションで育った子供たちに多いとされる。高所平気症が問題となるのは、高層マンションでの子供の転落事故である。もともと子供は立体的な感覚が未発達のため、自分の位置が危険なのかどうかを判断できにくい。そこでマンションの手すりから乗り出したり下を覗き込んだりしているうちに誤って転落してしまうことが多いとされる。

横浜の女儿転落死 「高所平気症」子供に危険な落とし穴

2007年6月28日15時37分配信 産経新聞

26日午後6時40分ごろ、横浜市緑区鴨居のマンション6階から女儿(11)が転落死した。神奈川県警緑署の調べでは、女儿は6階に住んでおり、部屋のベランダから落ちた可能性が高いという。

注5) 福川裕一・矢作弘・岡部明子、「持続可能な都市」欧米の試みから何を学ぶか、岩波書店、2005年

文1) Judith Littlewood, Anthea Tinker 『Families in Flats』 London Her Majesty Stationary Office 2001より

これについては、横山北斗「福祉国家の住宅政策 イギリスの150年」ドメス出版1998にも掲載。